

懸濁水性クロラムフェニコール（クロロマイセチンゾル筋注用）の使用経験

藤本安男・鉄谷多美子・後藤真清

大景 収・山本勝彦

関西医大第一内科

(昭和 41 年 11 月 4 日受付)

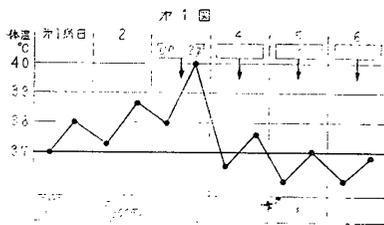
緒 言

Chloramphenicol は未だに耐性の上昇が比較的少く、広く使用されている。しかし溶解度の関係で、筋注に際して、用に臨んで蒸留水を加え、よく振盪してサスペンションの状態に筋注している。粒子の関係が沈澱を容易に生じ、また注射中に、注射針に粒子が閉塞する難点があつた。今回のクロロマイセチンゾル筋注用（以下 C.P.S. と略す）は粒子が小さく、しかも初めからサスペンションの状態としてあり、バイアル、アンプルに入れてある。ほとんど均質で、注射も容易であるとされている。今回の製剤は 250 mg/cc を含むもので、成人に主として臀筋に用いた。1回 1~2g (4cc~8cc) を1日 1~2 回筋注した。

第1例 , 26 才, 女

病名: 壊疽性扁桃炎

経過は第1図の如くで、C.P.S. の注射が有効であつたと考えられる。扁桃よりの菌は黄色ブドウ球菌であつた。発熱時、軽度蛋白尿があつたが、下熱と共に消失した。副作用なし。有効。



第2例 , 49 才, 男

病名: 急性大腸炎

2日前より誘因なく頻回の下痢 (1日 10回以上) 腹痛あり、便は血液はないが粘液を混ず。他医の加療で無効につき来院。赤痢菌陰性。

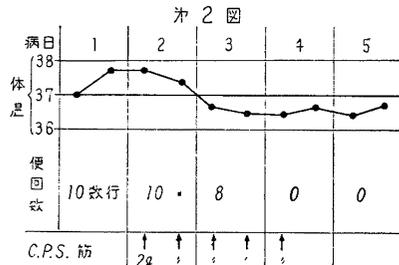
Mexaform と Chloramphenicol 1日 1g を1日投与したところ、嘔気、嘔吐あり更に下痢 1日 10回余あり。よつて Daricon 1.2g (1日量) の内服と共に C.P.S. 2g を臀筋に注射したところ、2日後すべての諸症状は軽快し、5日間で完全に治癒した。C.P.S. 合計 4g を用いた。副作用なく有効であつた。かかる症例のように嘔気、嘔吐ある場合には C.P.S. の注射は便利

である。

第3例 , 25 才, 女

病名: 急性大腸炎

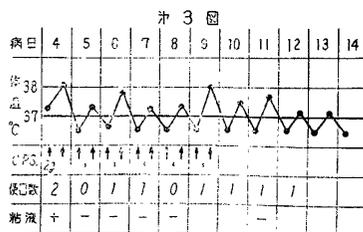
1日 10 数行の水様便あり、疑似赤痢として送院されて来たが、赤痢菌は証明せず、便から *E.coli* と *Klebsiella* を発見するのみであつた。*Klebsiella* のディスク法による感受性は CM (-), SM (-), KM (++) で、*E.coli* も同様であつたが、C.P.S. を使用してみたところ、諸症状は急速に緩解し、C.P.S. 合計 10g の筋注で治癒した。副作用としては、1回 2g の C.P.S. の筋注で局所痛を訴えた。他は特記すべきものはなかつた。有効であつた (第2図)。



第4例 , 57 才, 女

病名: 急性大腸炎

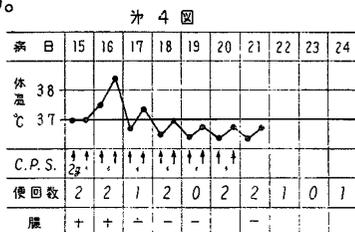
発熱と 1日数行の下痢で赤痢を疑つて送院されて来たが、入院は第4病日であり、赤痢菌は終始陰性であつた。便中の *E.coli* はディスク法で、CM, SM, KM, TC に感受性であつた。C.P.S. 1日 2g を2回を筋注6日間におよんだが、便回数、便中粘液の消失がみられたが下熱は完全でなく、その後自然に解熱した。やや有効と判定した。副作用は局所痛のみ (第3図)。



第5例 , 24 才, 男

病名 大腸炎

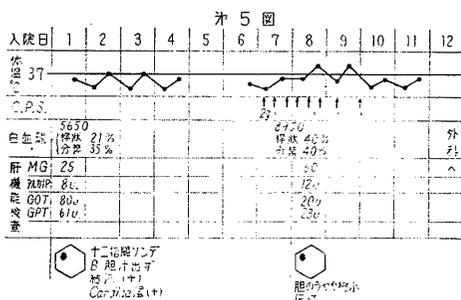
入院2週間前から1日2~4回の腹痛，下痢，時々38℃前後に発熱し，他医の治療でよくなり入院した。赤痢菌，腸炎ビブリオ共に陰性で，*E. coli*をみるが，これはだいたい感受性は(+)~(++)になっていた。C.S.P. 1日2g 2回，6日間投与し，治癒した。有効(第4図)。



第6例 ， 男

病名：胆石症（感染性）

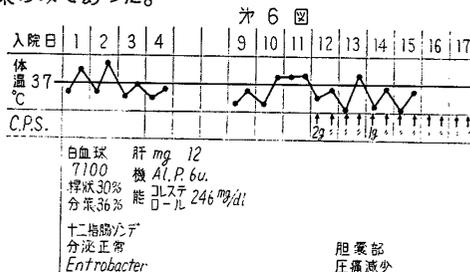
相当以前よりほぼ典型的な胆石発作を時々来していたが，その都度加療により軽快していた。本年7月14日初診，入院し，諸検査を実施し，C.P.S.も用いたが，結局，有石胆嚢炎であるため無効に終り，外科手術によつて軽快しつつある。術後の胆嚢は，肥厚し結石は4コあった。かかる有石胆嚢炎は，化学療法は治療の第1義的なものとなり難いことが多く，C.P.S.の効果の判定は不能である(第5図)。



第7例 ， 44才，女

病名：胆石症（感染性）

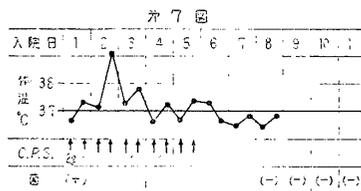
20年程前より有石胆嚢炎の発作あり。入院後の経過は(第6図)の通りであるが，結局治癒せず，外科手術によつた。元のC.P.S.の効果も第6例と同じく一時的効果のみであつた。



第8例 ， 29才，男

病名：赤痢

保菌者として発見送院されて来た。菌はフレキシネルIIa型。ディスクによる感受性はSM(-)，CM(-)，TC(+)，KM(++)の多剤耐性型であるが，C.P.S.を使用し，有効であつた。便の性状および回数は病初より正常であつた。副作用として，注射局所の疼痛を訴えた。しかし，その後の観察ではとくに硬結はなかつた。



結 語

1. クロロマイセチンゾル筋注用の新製剤は，使用にあつて便利である。
2. その臨床治療効果は，従来のクロラムフェニコールの筋注剤と同じ程度と考えられる。
3. しかし，使用に際し，やはり2~3回振盪して使用したほうがよい。

CLINICAL EXPERIENCE WITH CHLORAMPHENICOL SUSPENSION (CHLOROMYCETIN SOL INTRAMUSCULAR)

YASUO FUJIMOTO, TAMIKO TETSUTANI, MASUMI GOTO, OSAMU OKAGE & KATSUHIKO YAMAMOTO

First Department of Internal Medicine, Kansai Medical School

Chloramphenicol suspension (Chloromycetin Sol Intramuscular), a newly introduced preparation of chloramphenicol, was used in the treatment of 8 cases with acute infectious diseases, consisting of 4 colitis, 2 infectious cholelithiasis, 1 necrotic tonsillitis and 1 dysentery. It affected, in general, very favorably the course of the disease, and it was found to be equal in its effectiveness to chloramphenicol intramuscular (lyophilized vial). No side effects were observed, except moderate local pain on the injected site.